

	新	聞	切	抜	
		落	穂	拾	い

新聞切抜きの最大の利用者は、量的にはもちろん学生である。夏の約2ヶ月は「切抜きマラソン」が見られる。英語討論会の準備に必要な資料を手に入れるために、開館と同時に切抜きの出納台までのスピードを競う。その年のテーマが環境問題や、老人問題であったりすると、その関係資料を、いくつもの大学の学生たちが奪い合うことになる。しばらくの間は10時までに学生だけで満席になる。利用者の質を評価すべき立場にはないが、1950年代の第1次行政改革や、靖国神社問題をていねいに読んでいる人が、騒々しい学生を相手にした後などにはとても立派に見える。国会関係の利用を含めて古い資料がよるこばれることが多いのは、開室以来30余年間ほぼ同じ体系で蓄積されてきた厚みのゆえであろう。しかし、年月と利用によって破損も多く、かなりの数が出納不能になっている。この中で汚職関係、原発や教科書問題の初期のものなどは今後とも利用の多いことが予想されるだけに、マイクロ化の人も予算もつかない現在、コピーで複本を作るなど対策を考える必要があろう。新しいところでは、2～3日前までの日米自動車摩擦の資料を利用に来て、約半年の遅れにあきれて出て行った人もいる。何年かに一度は、切抜き室とは新聞が置いてあって、利用者が必要な記事を切り取れるところだと思って出かけて来る人にもぶつかる。

これ以上遅らせないための週8日処理体制は休みが計算に入っていないから、祭日があったり休みを取った時は、まず比較的簡単に分類できる約9割を片づけて、残りを「関連記事待ち」「再調査」の名目で分

類責任者の机に積み上げ徐々に消化する。消化しきれないものの蓄積が、Hコレクション、Sコレクションという「個人コレクション」を形成する。今、手近かのKコレクションをみると、『中年女性——忍ぶ仲・死のデート——車のトランクで熱射病』という関連記事なしの1枚がある。分類検討会議では「事故」から「姦通罪（切抜きは1948年からのもので、これに類する資料はない）」まで発言者の年齢や意識を反映した主張が折り合わず、コレクション入りした。インドシナ紛争も、複雑な上に新聞によって扱い方が異なり、同じ撃ち合いでも登場する国がちがって報道されたりして、さばききれなかった部分がコレクションに残っている。ダンボール箱一杯の個人コレクションをかかえても落ちついて仕事をする人もあるが、度胸のない人間にとって、このコレクションは休憩時間や年休に対する圧力になり、ストレスのもとである。限りなく増大するかのような新聞情報を見ると、最近いくらか増している新聞休刊日も焼け石に水の感がある。おくればせながらの4週5休も新聞が休まず発行される限りよるこんでばかりはいられない。資料の質や遅れはすぐに自分のレファレンス能力に結びつき、利用者の苦情を聞くのは「人が足りなければ遅らせればよい」と言い放ったり、手抜きをすすめる外部の人ではない。従ってやむなく自分達の首を締めつつ毎日をやりくりし、ひたすら休刊日を待ち、外国なみの新聞ストなどを期待することになる。

機械化、索引化をすすめる動きも出ている中で、同じ主題の流れを長期間分通覧できるのはここだけ、という声などにはげまされ、速効性ばかりを追い求めず、国会図書館らしい最終的な拠り所として信頼できる積み重ねを、と半ば居直っているこのごろである。

(閲覧部新聞雑誌課 久保田愛子)